

貞「これほうづきのかはりになるの」

俊「始め甘いけど少したつとすっぱいね」

○「すっぱいね」

儀「おいしい、両方だ、甘いのと酸っぱいのと」

——右保育日誌の一節。六歳児——

かう書いて見ますと、「だからかうだ」といふ何物もなくわながらまことにたわいの無いやうな氣がしますが、もの或はことに對して幼児がどう動いてくれるかといふことをみるにはようございました。

猶葡萄そのものに就いての委しいことは繪でも描かせる時に、葉やつるを添へての折にゆづることにしました。

猶葡萄そのものに就いての委しいことは繪でも描かせる時に、葉やつるを添へての折にゆづることにしました。

車で運ぶこととしてゐます。  
毎朝八時出席調べをして出かけます。風の風いだ静かな茅渟の浦ルリ色に碧空、さながら鏡と鏡、かすかに浮ぶは淡路島波間近くたはむれる小鳥も見えます。幼児達は「先生あれ何といふ鳥? お空がきれいやなーうちすきやで」など話し合ふ折

伸びて行かう、手も足も出來得る限り伸びさう

## 臨海保育の所感

### 岸和田市幼稚園

て行く。あれ／＼蒸氣や／＼と、手をたゞいて喜んで居ります。又或日は風強くて、打ち寄せる大波はものすごいまでに音をたて、すさまじくだけ散つては又寄せてゐる。子供達はこの大波を相手に、ここまでおいで／＼とかけくらをしてゐます。かと思へば岡に引き上げた舟にのつては、恰も大海に乗り出したやうな氣取りに得意がつて居るものあります。或時は極めて自由に畫を描く、お話をきく、お遊嬉をする、蓄音機をきく、たまたみ紙などして喜んで居ます。時には地網引の光景を觀ました。婦女子を交へた數人の手で網引歌につれ、ロクロは廻される、傍で網は引かれる、見てゐる子供達は、もはやぢつとしては居られません。思はず、われも／＼と馳け寄り、頬を真赤にエンヤ／＼とばかり引く。網は次第に引き上げられ、引く人、見る人、眼は一齊に網の中、幼児はビチ／＼はね廻る小魚を捉えようと夢中に走りよ

る。「ぢいちゃん一匹頂戴」とめい／＼一二匹づゝ手にしたうれしさは想像するに餘ります。歡喜にあふれた可愛い顔が、つぶての様に走るよと見れば、砂を掘るもの、海水の通路を作るもの、忽ち生洲が出来ました。さながら水族館のやう。それは魚を活かす事より他に何物もありません。この幼兒達創造の世界が自然の恩恵に浴することの深いことを感謝せずには居られません。實にこの廣い自由な天地で、活々とした自然物による幼児天真の發露こそは、彼等に與へられたる特權であります。

かかる活動の後、涼しいバラツクの中で靜かにてゐる子供達は、もはやぢつとしては居られません。思はず、われも／＼と馳け寄り、頬を真赤に喜ばし疲勞を慰する事が出来たでせう。

一ヶ月に近い、かうした生活を續けて居る幼児達は日に日に皮膚の色こげ、筋肉も何となく引き緊つたやうに見えかつて因循なりし子供達も次第

に子供らしさを増し、如何にも澄測として來たやうに見られます。今月末の調査には、體重もたしかに増して居る事と想像されます。更に來年は、一層設備の點を考へて、身體の虛弱な子供や、個性に注意を要する子達と寢食も共にして、より以上効果を擧げたいと存じて居ります。

## 園外保育

山崎ひさ

蟹狩り 七月一日午前九時半發

海に這入りたいな、との聲を耳にして、

昨日の約束により、藥用鞄を用意して、三の丸、廣小路を通り、島崎海岸へ引率した。どんよりと曇つた空には、氣もとめず、行進の意氣につれ、歌ふ牛若丸の元氣よさは、町の人々を、驚歎させた程であった。彼等はいつか、撫子組と、菊組が外遊の際、持つて歸つた蟹が、羨やましかつたの

で、今日は蟹狩りの氣分であつた。  
魚屋の露店、兩側に並んで賑はしい中を通り、新橋を渡り、やがて稻荷神社についた。一同參拜を終つて海邊近く引率した。  
一同瞭然と、舞鶴灣は、靜な海上に、二三の發動船を玩具のやうに、浮かべ、丹後富士の雄姿は其の美しい影を四方の連山と手をとつて、水に寫してゐた。子等は思ひくに語りだした。その鋭敏な觀察は驚異の眼をはり全身全靈の緊張を示し、得も云へぬ尊さであつた。

海をごらん、今日は、あの様に、波はなく靜でせう。ところが、風が吹き、大波がきたら、どうでせうか。今あなたらの頭の上迄も、來るのですよ。この高い蘆の上には、泥が付いて居ます。それから、此の柔い路を、考へてごらん。小さな穴が、いくつもくも、あつて、何かで突いたら、直ぐ